

宮崎県都城市嫁坂遺跡出土の土製円盤（板）

今塩屋 毅行・加藤 真理子
(宮崎県埋蔵文化財センター)

1 はじめに

今回報告する出土資料は、宮崎県都城市に所在する嫁坂遺跡（宮埋文セ 2019）の土製円盤（板）と縄文土器深鉢である。これらの遺物は、遺物整理・報告書作成における諸般の事情から未掲載となっていたものであり、今回の報告によって既報告分の補完となることを企図したものである。

2 嫁坂遺跡の概要

（1）遺跡の立地と調査履歴

嫁坂遺跡は、都城市大字梅北町に所在する縄文時代～中近世にかけての複合遺跡である。遺跡の立地は、都城盆地南縁部を取り囲む鰐塚山地の支脈である金御岳・天ヶ峯の裾野に広がるシラス台地上である。このシラス台地は大小の開析谷や大淀川に流れ込む小河川によって、やつて状に分断された丘陵地形となる（図1）。

嫁坂遺跡は、過去2回の本発掘調査（平成10年度、平成28・29年度）を受けており、その調査記録は「嫁坂遺跡」（宮埋文セ 2002）および「嫁坂遺跡II」（宮埋文セ 2019）として公開されている。今回報告する土製円盤は、平成28・29年度に実施された調査分（「嫁坂遺跡II」所収分）である。平成28・29年度の発掘調査では、縄文時代早期の集石遺構、前期～中期の集石遺構と土坑、後期～晩期の集落跡（竪穴建物跡・土坑）等が計5箇所に分かれた調査区（A～E区）から検出されており、竪穴建物跡7軒と土坑15基から出土した土器の型式は、宮之迫式・市来式・御領式・中岳II式や入佐式等がある。とりわけ、後期末～晩期初頭頃の深鉢形土器（深鉢）の型式変化のあり方やその方向性には、「古いもの（属性）に新しい形態を取り入れていく（発現させていく）」様相が具体的に読み取れるという（甲斐尚和 2019）。

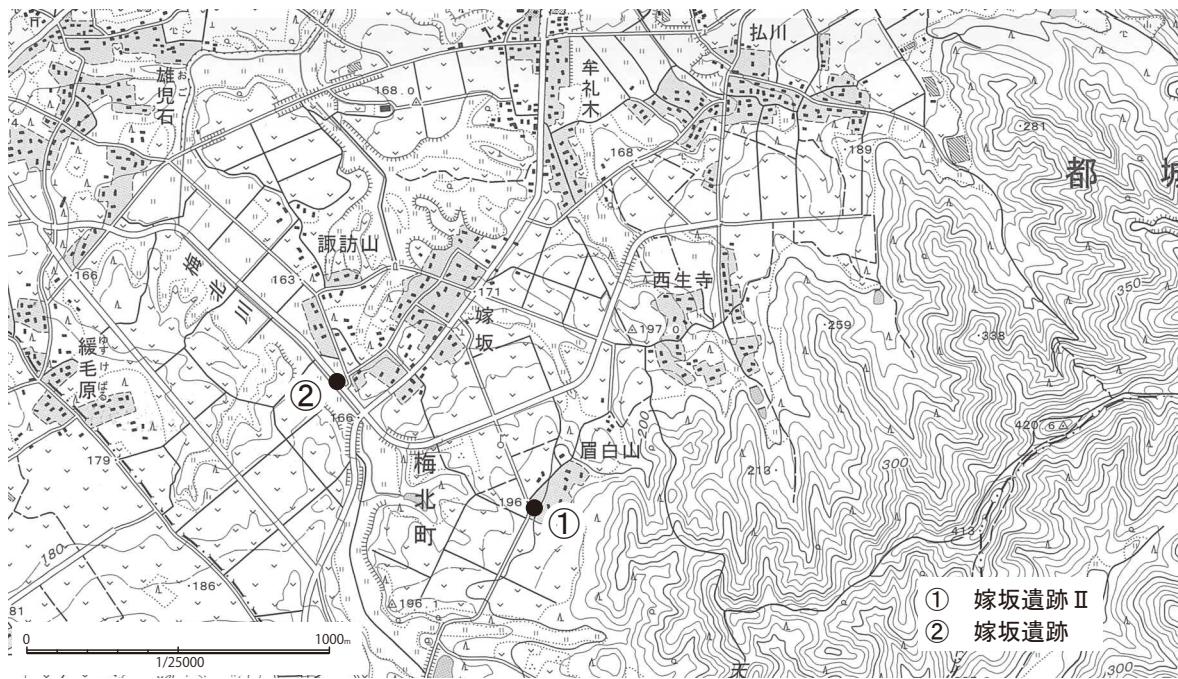


図1 嫁坂遺跡位置図 (S=1:25,000)

3 土製円盤（板）について

（1）出土状況

土製円盤（板）とは、「土器の破片を加工して、そこに機能をもたせた形態のもの」（丹野 2008）であり、円盤状土製品とも呼称される土器片の再利用品である。土器片加工円板ともいう。この土製円盤は、B区（平成28年度調査「嫁坂遺跡II」）のV層（縄文時代後～晩期の遺物包含層）から合計12点出土している。遺構内出土のものはない。器面調整痕跡や胎土のあり方から縄文土器の破片を再利用したものである。土製円盤の出土分布は、平面的にはF43グリッドとG42・43グリッドに偏在しており、包含層出土遺物は「調査区南側にある谷に向かって多くの傾向」（宮埋文セ 2019）と同調的である。またB区内では、堅穴建物跡3軒（SA2・SA3・SA6）と、土坑3基（SC2・SC5・SC54）が検出されている。このうち、土製円盤の出土したF43/G42・43グリッド内にある遺構は、SC5とSC54である（図2）。

（2）土製円盤とその内容

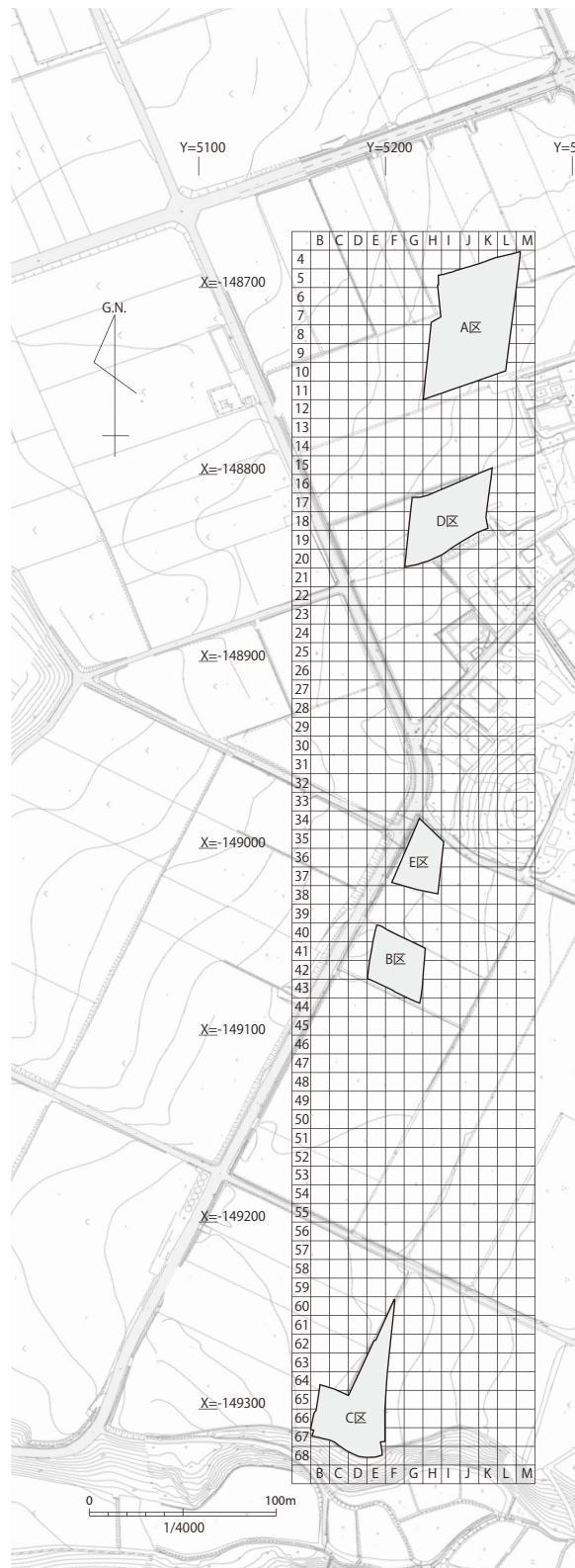
366～377は土製円盤の実測図（図3）、表1はその観察表である。遺物掲載番号は、「嫁坂遺跡II」の掲載分からの連番とした。平面形（多角形／円形／楕円形）、法量（長径／短径／中心部の厚み）に加えて、側縁部（円盤の周縁部や端部）に見られる平滑な面取り部分、すなわち「研磨」（丹野 2008）について、範囲・状態（剥離調整のみ／平滑／剥離面残存）・度合い（研磨の進行度）についても観察記録を行った。

平面形は円形と多角形があり、大きさは直径約2.9cm～約5.5cm、厚みは約0.9cm～約1.7cmの間に収まる。直径は、大きく約2.9cm～約3.5cmのグループと約4.6cm～約5.6cmの二つのグループに収まると考えられる。図4は長径と重量、長径と厚み、長径と短径の3点から見た相関関係で、残存が1/2である377を除く、完形の11点についてグラフ化した。今回計測した中で最も軽い個体は6.7g、最も重い個体は40.7gである。長径が小さいグループは、大きいグループに比べ重量が軽いという傾向が見られるが、個別に見てみると長径の大きさと重量は必ずしも比例しておらず、376のように長径が11点中最長であっても重量が軽いものもある。これは使用する土器の器種や部位の違いによる差だと考えられる。

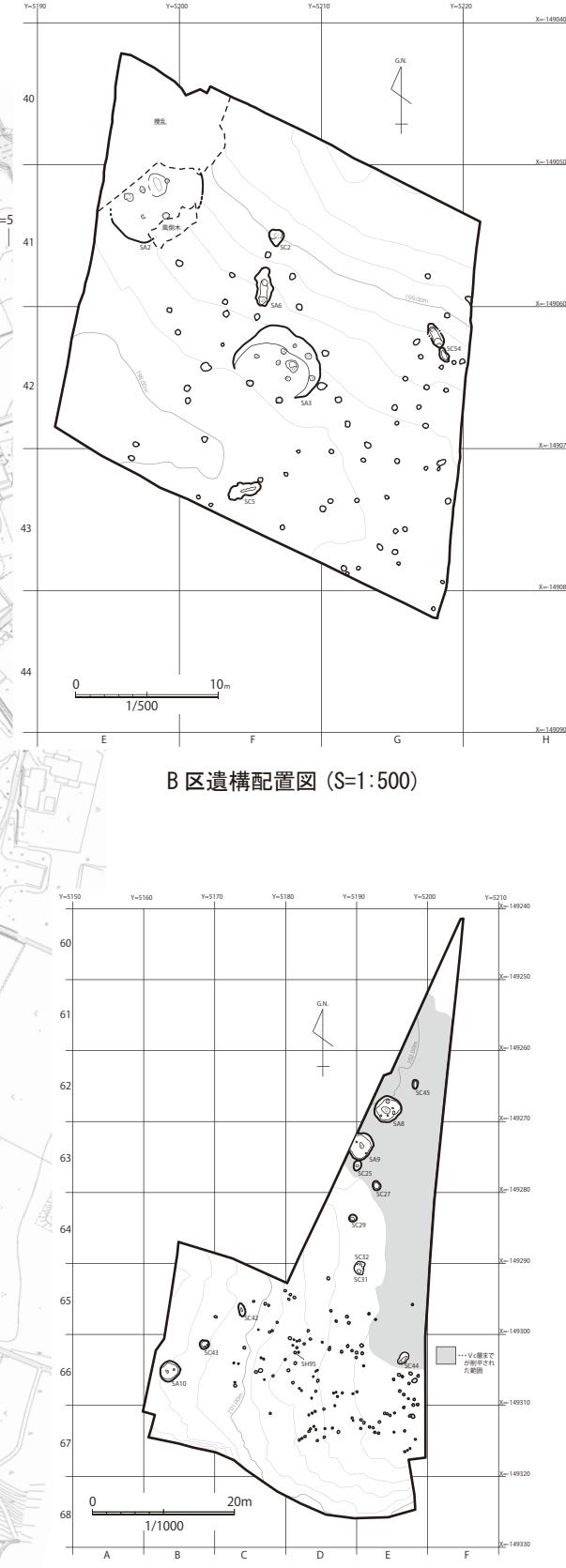
また、長径と短径の関係について、嫁坂遺跡から出土した土製円盤は平面形が多角形（略正方形・略長方形・略円形）と円形に分かれているが、長径と短径の差は大きいもので約0.5cmほどで、ほぼ長径と短径に差は見られず、今回確認した11点は器形に大きな違いは見られない。さらに、厚みに関しては、長径の大きさに関わらず約0.9cm～約1.2cmの間に収まるものが多い結果となった。長径が大きいグループは厚みに多少のばらつきが見られ、同一の個体であっても側縁部の厚みが均一ではないものがある。径が大きければ使用する破片もその分大きくなるため、同一の個体であっても厚みにばらつきができることが考えられる。なお、今回グラフ化するに当たり、どの個体も前述のとおり中心部の厚みを計測している。

同じ側縁部の状態については、粗く打割した剥離面のみが残る3点（366・369・370）以外は、何らかの研磨痕跡があるものである。研磨が進み、剥離面が消失ないしわずかに認められるものは、367・368・371・373・374・375・377があり、その度合いから高～中程度に区別した。また、372・376は剥離面が大半で一部に研磨（剥離面の潰れ）が認められる資料で、その研磨度を低程度とした。

大きさと研磨度の関係性は、大きさ別にそれぞれ側縁部に剥離面がそのまま残るもの、研磨にて剥離面が部分的に消えるもの、さらに研磨が進み平滑となるものが認められる。この研磨痕跡



調査区配置図 (S=1:4,000)



C区遺構配置図 (S=1:1,000)

図2 嫁坂遺跡調査区配置図・B区、C区遺構配置図

(『嫁坂遺跡II』宮崎県埋蔵文化財センター 2019 より改変・転載)

にみる擦痕方向は、肉眼観察によれば水平方向（376など）と読み取れる。

（3）まとめ

a) 土製円盤の時期

土製円盤それ自体からは土器型式の判別は困難であり、年代推定の手掛かりにつながるものに乏しい。そこで、土製円盤の出土したB区遺物包含層などから出土した土器型式から時期推定を試みることとする。まず、遺物包含層から出土した縄文土器は、宮之迫式・中岳II式土器の土器片のほか、入佐式・黒川式土器の深鉢や浅鉢があり、遺構内土器にはSA2（宮之迫式・市来式土器）・SA3（宮之迫式土器）・SA6（宮之迫式）がある。SC2とSC54では炭化物の放射性炭素年代測定結果が得られている。このように遺物包含層出土の土器型式からは概ね後期前葉・後葉および晩期、遺構出土土器や炭化物の測定年代では後期前葉～中葉の時期が求められる。よって、遺物包含層および遺構内出土土器の型式幅を勘案すると、土製円盤は縄文時代後期前葉～中葉（宮之迫式期）、後葉（中岳II式期）ないし晩期（入佐・黒川式期）のいずれかの時期に所属する蓋然性が高いものと考えられる。

b) 土製円盤の意義

土製円盤の用途や機能については、既に古くから論じられているところであり、丹野雅人氏の論考に詳しい。丹野氏によれば「確たる用途の特定まで至っていないのが現状」（丹野 2008）とのことである。改めて「嫁坂遺跡II」出土の土製円盤に着目すると、側縁部は剥離面のまま、剥離面が潰れて「研磨」面（平滑面）が生じるもの認められる。すなわち、縄文土器の深鉢ないし浅鉢の破片を打割し、一定程度の大きさに側縁部を剥離したあとに、剥離面を平滑にする行為が伴ったことを意味するものである。側縁部にみる研磨面（平滑面）を、土器片から新たな道具として再加工する際に側縁部を面取りした結果なのか、何らかの道具として剥離面のままで使用した際に生じた使用痕とみるのかは、実験も視野に入れた検討が必要であって本稿ではそこまでは論じ得ず、今後の課題としたい。

なお、先述の丹野氏をはじめ、海老沢郁雄氏（1988）や藤巻正信氏（1989）および小薬一夫氏（1991）らは、この土製円盤の用途を「研磨具」とし、その側縁部の研磨痕を使用痕と結論づけている。具体的には木器・骨角器・石器・土器を対象とした「仕上げ砥」や「研削具」の使用とされている。翻って、嫁坂遺跡出土の土製円盤には大きさに一定のまとまりがあること、胎土には鉱物や砂粒の含有が高くザラザラとしたもの（深鉢）や精選されて粘土粒子の多いもの（浅鉢）があるが、これらを仮に「研磨具」とみるならば、土製円盤12点の構成は、大きさと研磨具としての目の粗さの違いを組み合わせた道具立てという理解が可能ともいえよう。

4 縄文土器深鉢の追加掲載資料

未報告資料のうち、破片が大きく土器型式等の比定が容易なものを4点図化掲載した（図5・表2）。378～382は深鉢の口縁部である。378は口縁が肥厚し、口唇端部を面取りして直立気味に立ち上がる。内面には横方向の強いナデ、外面は工具による横方向のナデが施されており、外面の一部に黒斑が見られる。379は口縁部が肥厚し、ゆるやかに外反して立ち上がる。頸部付近に屈曲が見られ、内外面ともに摩滅しているが、内面は縦横方向のナデ、外面は横方向のナデが施される。380は口縁部が肥厚し、二本の横位の沈線文を施す黒色磨研土器である。内面は一部

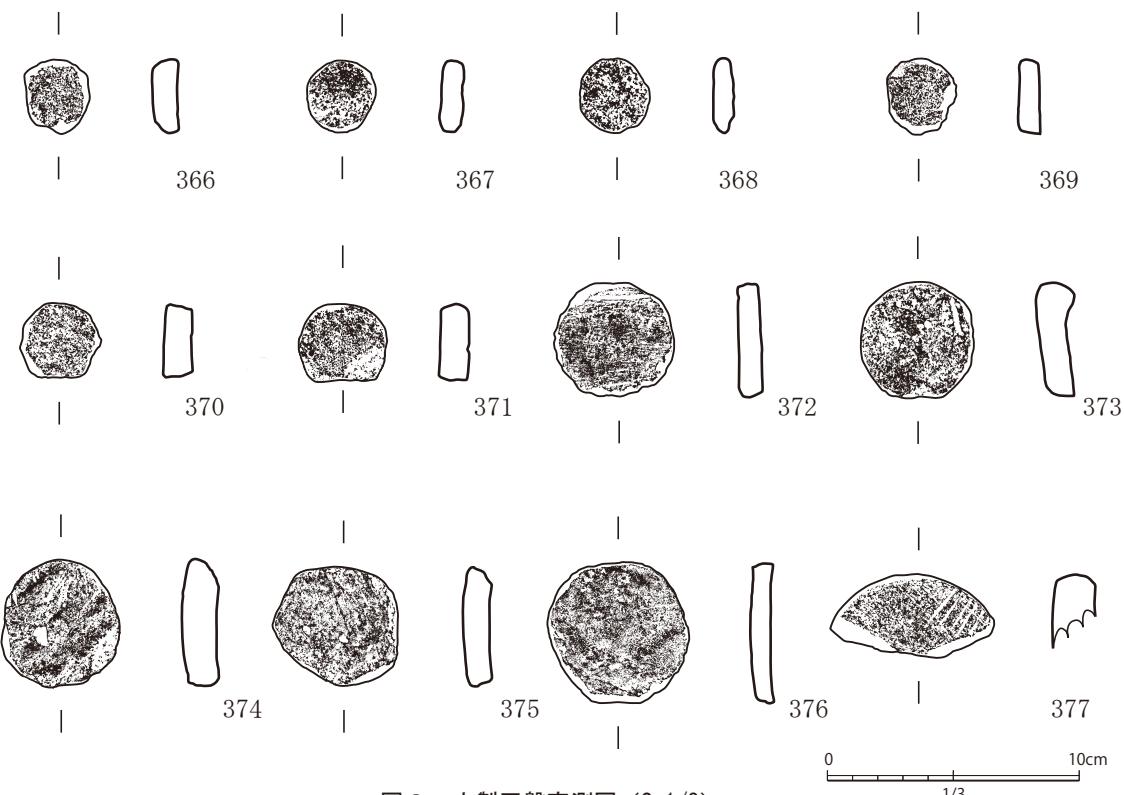


図3 土製円盤実測図 (S=1/3)

表1 土製円盤（板）観察表

掲載番号	出土地点	平面形	法量(cm)			重量(g)	側縁部の状態			使用部位	残存率
			長径	短径	厚		研磨の範囲	側縁部(研磨面)の状態	研磨度		
366	B区 G43	多角形(略正方形)	3.0	2.5	1.0	9.5	-	剥離のみ	-	深鉢(胴部)	完形
367	B区 G42	円形	2.9	2.7	1.0	7.7	部分研磨(全体の5/6)	平滑(稜あり)	高	深鉢(胴部)	完形
368	B区	円形	3.0	2.8	0.9	6.7	全周研磨	平滑(稜あり)	高	深鉢(胴部)	完形
369	B区.-342	多角形(略円形)	3.0	2.7	0.9	9.3	-	剥離のみ	-	深鉢(胴部)	完形
370	B区.-341	円形	3.2	2.9	1.1	13.2	-	剥離のみ	-	深鉢(胴部)	完形
371	B区 G43	楕円形	3.5	3.0	1.1	14.1	全周研磨	平滑(稜あり)	高	深鉢(胴部)	完形
372	B区 F43Gr.-3j	円形	4.8	4.5	0.9	26.0	部分研磨(全体の2/3)	平滑(一部)/剥離面(大半)	低	深鉢(胴部)	完形
373	B区 F43Gr.-2j	円形	4.6	4.5	1.2	28.8	全周研磨	平滑/剥離面(わずか)	高	深鉢(口縁部)	完形
374	B区 -1946	円形	5.0	4.6	1.4	40.7	全周研磨	平滑/剥離面(ややあり)	中	深鉢(胴部)	完形
375	B区 G42-1915	多角形(略長方形)	5.0	4.7	1.1	30.6	部分研磨(全体の2/3)	平滑(稜あり)	高	深鉢(胴部)	完形
376	B区 G42-1928	円形	5.6	5.5	0.8	30.9	部分研磨(全体の3/4)	平滑(一部)/剥離面(大半)	低	浅鉢(胴部)	完形
377	B区 F43Gr-.4j	円形	3.2	-	1.7	33.2	部分研磨	平滑/剥離面(わずか)	高	深鉢(底部?)	1/2残存

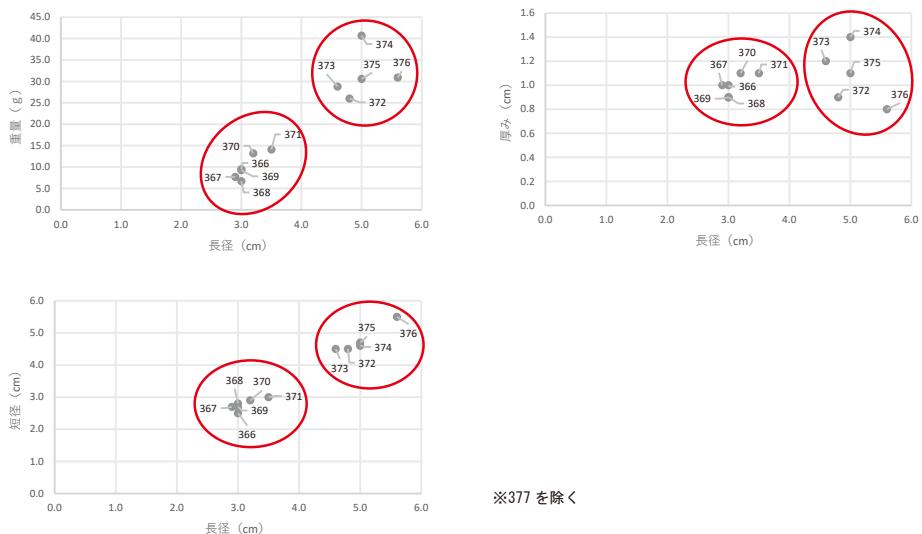


図4 土製円盤（板）散布図（左上：長径・重量、右上：長径・厚み、左下：長径・短径）

摩滅しているものの横方向のミガキが、外面に横・斜方向のミガキが施されており、外面にわずかにススが残る。381は口縁部が肥厚し、やや内傾しながら肩部近くで屈曲する。内面は摩滅しているが横方向のナデを、外面についても横方向のナデを施す。外面にわずかにススが残る。382は、口縁部が肥厚し、わずかに外反する。外面の一部に横方向のミガキが、内面は摩滅しているが一部ミガキが施されている。

器形の特徴から、378、379、381、382は入佐式の深鉢と考えられる。378は直立気味に、379は外開きに、381はやや内傾しながら立ち上がっていく違いが見られるが、口縁部の肥厚が共通している。その他、382は入佐式の黒色磨研土器、380は中岳Ⅱ式の黒色磨研土器と考えられる。（堂込 1997、宮地 2008）。

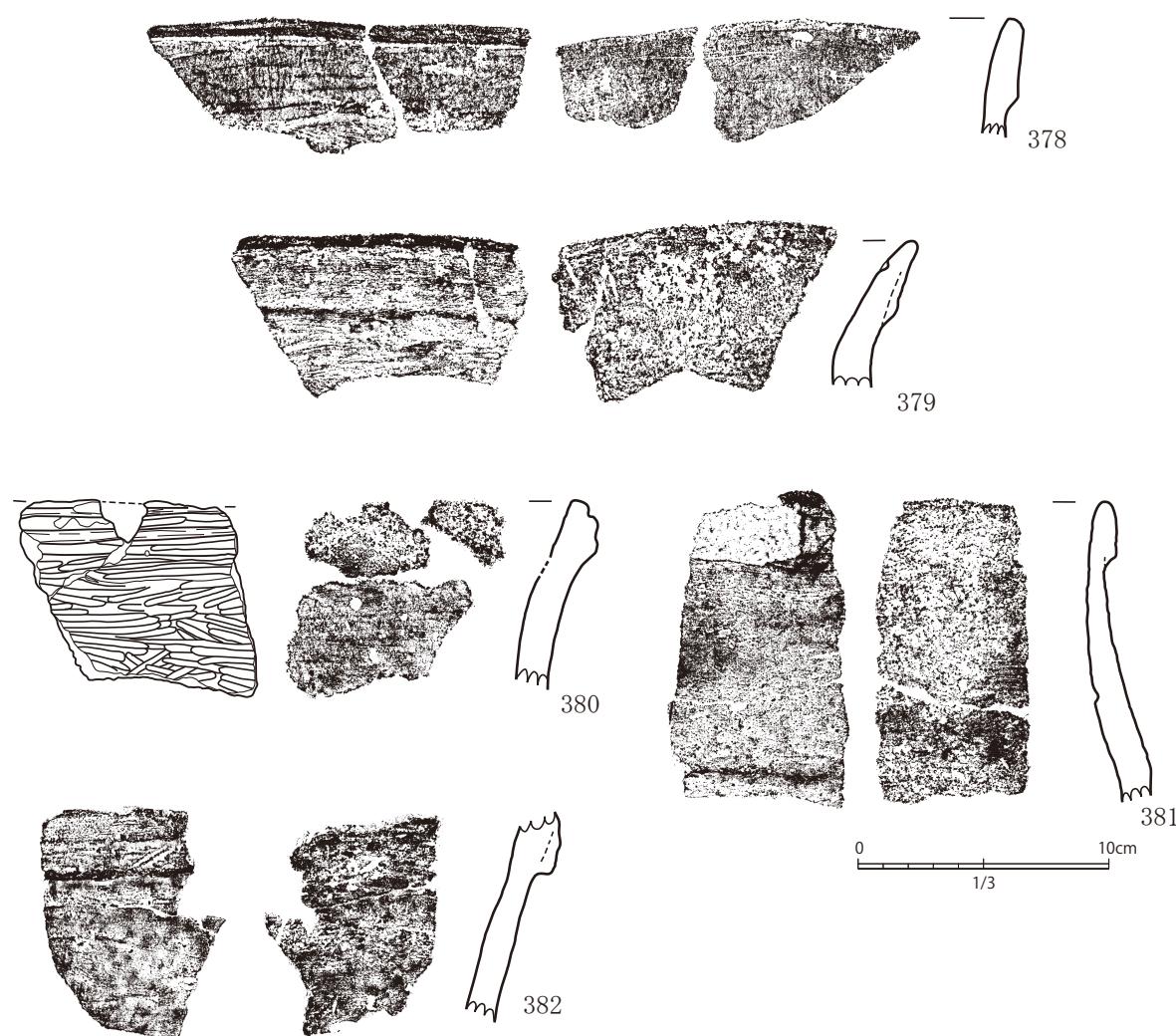


図5 繩文土器実測図 (S=1/3)

表2 土器観察表

No.	種別	器種	区	出土位置	部位	文様・調整		色調		胎土
						外面	内面	外面	内面	
378	縄文	深鉢	C	SA8	口縁部	横方向の工具ナデ	横方向の強いナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/1 褐灰	微細な透明粒、多孔質な白色粒
379	縄文	深鉢	C		口縁部	横方向のナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	半透明粒、黒色粒、微細な透明粒
380	縄文	深鉢	C		口縁部	横・斜方向のミガキ	横方向のミガキ	5YR2/1 黒褐	5YR3/2 暗赤褐	微細な半透明粒、多孔質な白色粒
381	縄文	深鉢	B	G43	口縁部	横方向のナデ	ナデ・指頭痕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	半透明粒、黒色粒、多孔質な白色粒、微細な透明粒
382	縄文	深鉢	B	G43	口縁部	横方向のナデ・一部ミガキ	横方向のナデ・ミガキ？	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y6/2 灰黄	微細な透明粒、多孔質な白色粒

本稿で掲載した遺物の図化掲載は、当センター職員等の協力を得、論旨構成や執筆については今塩屋・加藤が共同で行った。また、写真撮影、レイアウトは竹田享志の協力を得た。本稿を成すにあたり、多くの方々にご協力やご教示を賜りました。

御芳名を記して深く感謝いたします。

井場良一 今塩屋毅成 甲斐尚和 加藤徹 小園博子 呉屋直子 武野美智子 畠中美穂
田中伸久 平井祥蔵 福田理恵
(五十音順)

引用・参考文献

- 海老沢郁雄 1988 「所謂土製円盤の用途について」『栃木県考古学会誌』9集 栃木県考古学会
甲斐尚和 2019 （第VI章 総括）「嫁坂遺跡II」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第249集
小葉一夫 1991 「土製円盤の機能的側面について」『東京の遺跡』No.28 東京考古談話会
桑畠光博 1989 「中岳II式土器の再検討」—東南部九州におけるある縄文土器の型式組列—『鹿児島考古』第23号 鹿児島考古学会
丹野雅人 2008 「土器片加工円板・錘」『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション
堂込秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討—入佐式と黒川式の細分—」『鹿児島考古』第31号
鹿児島考古学会
藤巻正信 1989 「土器片円盤について」『新潟県考古学談話会会報』第3号 新潟県考古学談話会
宮地總一郎 2008 「黒色磨研土器」『総覧 縄文土器』総覧縄文土器刊行会
吉本正典 2012 「黒川式土器の歴史的位置」『九州考古学』第87号 九州考古学会

報告書一覧

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2001 「母智丘谷遺跡 畑田遺跡 嫁坂遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第62集
宮崎県埋蔵文化財センター 2019 「嫁坂遺跡II」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第249集

図・表出典

- 図1 國土地理院地形図1:25,000をもとに作成
図2 発掘調査報告書（宮崎県埋蔵文化財センター 2019 第2図、第24図、第35図）から改変・転載
図3～5 筆者らによる作成
表1・2 筆者らによる作成

